

第1章 組織の行動

【要約 by 武井靖弥】

本書は公式組織の理論に関するものである。公式組織の言葉の定義をするよりも、経験的な事象から例をあげたほうがより簡単で、かつ有用である。今まで数多くの組織についての書物が書かれているが、それでも組織理論は現代の社会科学の中で重要な地位を占めてはいない。この理由はいくつか考えられるが、組織について既知のことが非常に少ないので、文献の中で書かれていることも非常に少ない、という理由が大体当たっていることがわかるだろう。

1.1 社会的制度としての組織の重要性

しかしどうして組織は重要なのか？すぐに出てくる解答は、人々が非常に多くの時間を組織の中で過ごすから、というものである。しかしこのような組織の偏在性のみが組織研究の唯一の理由ではない。我々は社会学者として、人間行動の解明に興味があり、人間行動が環境からどのように影響を受けるのかに興味を持っている。もし環境の人間行動への影響過程の特徴を一言で要約しようとするならば、組織以外の影響過程の「拡散性」に対して、組織の中の影響過程の「特定性」を指摘することができる。組織内コミュニケーションは、経路についてだけでなく、内容についても高度の特定性を示している。両者の質的な差異の程度が非常に大きく、それが大変重要なことなのだ。

組織の中のコミュニケーションを特徴づけている大きな特定性は、役割という社会学の概念を用いて、別の方法で説明することができる。組織の役割は高度に精巧に決められ、かつ比較的安定している。その役割はそれを果たす個人のために決められているだけでなく、彼と交渉する機会のある組織の中の他の人々にも知られることになり、この結果組織のメンバーそれぞれを取り巻いている環境としての他の人々は、高度に安定し、予測可能なものになる。この予測可能性により、組織が環境に対し、調整のとれた方法で対処することができる能力を持てるのである。

1.2 組織理論の文献

本書の中でわれわれは、組織について述べられてきた重要なものの中のあるものを、体系的な方法で検討することになる。これまで社会学者によって組織を理解するためになされた努力は大きくはなかったが、組織理論の断片と経験的なデータは、広範囲のソースから集めることができる。しかしこれらの散漫な組織についての著作を集めて、一般化しようとするためには2つの重要な問題を乗り越えなければならない。第一はこれらの文献は、何かを繰り返し繰り返しささまざまな言葉で語ってはいるが、結局のところ組織については多くを語っていないのではないかという印象を残すことであり、このため我々は共通の言葉を作る必要がある。第二はこれらの文献の中で、仮説と証拠の間に大きな乖離があることである。本書ではどのような証拠が存在するか振り返り、検討を加える。まず既存の仮説のあるものを検証しやすくするように言い換えてみる。そしてそれぞれの場合にどんな種類の検証が意味をもち、実際的であるか示してみる。

1.3 本書の構成

組織についての命題は、人間行動についての言明であり、組織の中の人間行動を説明するためには、人間の性質のうちのどれを考慮に入れるべきか、ということについての一連の仮定が、このような命題の全てに前提として含まれている。組織内行動についての諸命題はその仮定の如何によって、3つに分類することができる。

1. 組織のメンバーは、受動的器械であると仮定する命題。
2. 組織のメンバーは、態度、価値、目標を組織に持ち込むものと仮定する命題。
3. 組織のメンバーは、意思決定者かつ問題解決者であると仮定する命題。

これら3つの仮定は相互に矛盾するものではない。人間はこれらの側面すべて、あるいはそれ以外の側面をも持っているだろう。組織内の人間行動についての適切な理論は、人間のどの側面も考慮に入れなければならないことになる。そこでわれわれは、諸命題を分類し、既存の知識を体系化するためのもっとも重要な基礎として、これらの3つのモデルを用いたいと思う。

1. 4 いくつかのタイプの命題

本書の中心的な核となるものは、組織についての一連の命題である。命題の種類には以下のタイプがある。

1. 一つの変数が、他の一つもしくは二つ以上の(独立)変数に従属していることを表す命題。広い意味でこのタイプの中に入る命題には次の二つの種類がある。(a)数値のある範囲を表現することのできる変数をもった命題、すなわち量的データの変数についての命題。(b)変数のうち一つないしは二つ以上のものが二者択一的な種類のもの、もしくは順序づけられないカテゴリー的な値を表している命題、すなわち質的データの変数についての命題。
2. 組織についての質的で記述的な一般化を含んでいる命題。
3. 特定の組織内構造ないし過程が、特定の機能を果たすことを主張する命題。

1. 5 いくつかの心理学的な公準

最後に人間有機体について、とくにその中枢の神経系統についてのいくつかの公準を述べてみたい。それはこれからの分析の全体の基礎となるものである。

短い時間内での有機体の行動は、(1)その期初におけるその有機体の内部状態、(2)その期初における環境、によって説明することができる。期初状態及び環境という要因が行動を決めるばかりでなく、次の時点での内部状態をも決める。人間有機体においては、内部状態のほとんどはわれわれが記憶と呼んでいるものの中に含まれている。人間の記憶の内容を特定化するというと、その時点でその行動に重要な影響を及ぼす部分と、これよりもはるかに大きいとその時点でその行動にほとんどもしくはなんら影響を及ぼさない部分とにわかれる。前者を「喚起された集合」と呼び、記憶の内容を後者から前者に移行させる過程をその内容の「喚起」のための過程と呼ぶ。行動に影響を及ぼすことができるのは、記憶の内容における変化(学習)をもたらすことによってか、現在の行動に対する積極的な決定因を変化させること(喚起)によってである。学習と喚起過程との間の差異に基づき、

影響の理論において常にこの二つの過程を区別しておくことが重要である。

これは環境の諸側面についても行うことができる。すなわち、ある時点において、その次の期間の行動に重要な影響を及ぼす環境の側面と、及ぼさない側面とを区別できる。前者は刺激と呼ばれる。刺激と喚起された集合の間には強い相互作用がある。ある時点において存在した刺激は、どのような集合が喚起され、ないしは維持されるかを定める主要な決定因である。反対に、ある所与の時点における喚起された集合は、環境のうちのどの部分が刺激として有効になるかを定める主要な決定因である。

有機体の内部状態や、環境を以上のように区別することは、有機体の基本的な性格である。内部状態もしくは環境において、その能動的な部分と、受動的な部分とをどのように区別するかということは、観察するために選んだ時間の長さに依存するだろう。「能動的」要素と「受動的」要素とにわけられた記憶の内容は、これと異なる別の方法によっても分類することができる。それは (a) 価値ないし目的、すなわち考えられた行為のコースの中でどのコースが選好されるかを定めるのに適用される基準、(b) 行為の一つのコースからもしくは別のコースからのちに続いて起こるだろう結果についての信念、知覚、期待、(c) 代替案、すなわちありうる行為の諸コース、という3つを含んでいる。

これらの要素のうち一つが刺激によって喚起されたとき、それと学習過程を通じてつながっている多くの他の要素もまた、喚起された集合の中に持ち込まれる。ある行為のコースの喚起は連想によってその行為とつながっていた諸結果の喚起を導くことであろう。これまで述べてきたことが組織内行動を分析するために我々が用いる人間有機体の一般的な姿である。我々は人間有機体のこの特有な性格が、組織の中の人間行動の顕著な性格のうちのあるものにとって、基礎になっているということを見ていくことになるだろう。